



納西族東巴教「求寿」儀式調査



夏 宇継 (COE共同研究員 / 神奈川大学大学院・非常勤講師)

2003年末から新年にかけて、麗江^{リージャン}から迪慶^{ディーチン}へ雲南シャングリラの旅をした。この地に息づく納西族東巴文化^{ナシ トンバ}に大いに魅了された私に、麗江市東巴文化研究院の張福龍^{チャンフーロン}氏より、半世紀以上も途絶えている東巴教「求寿」(延寿ともいう)儀式を協力して復活させ、後世に伝えようとの提案があった。それからの十五ヶ月、我々は絶えず連絡を取り合い、白庚勝氏^{バイゴンション}ら専門家や老東巴たちの意見を聞き、資料を集め、現地の予備調査をした上で、今回の儀式実施を決意したのである。

東巴教「求寿」儀式

東巴教は、納西族の原始宗教から創唱宗教¹への過渡的な性格をもつ宗教である。東巴文化は主に、その3、40種類にもよる宗教儀式によって表現され、伝承される。

「求寿」儀式は、大中小20余りの儀式が交錯し有機的に組合された総合的な儀式で、東巴教儀式のなかで最大規模を誇る。また、それ自体が東巴のためのものであり、華神を招き、儀式の対象となる東巴の属する一族の生命力を盛んにし、無限の活力をもてるよう加護を求める。また「加威靈」という特徴的な内容を含み、盛大な「加威靈」儀式を通して、参加した普通の東巴たちに「神名」を与え、同時に神の威力、靈力を大いに付与するものである。

この儀式の膨大さ複雑さは、三つの「多」と言われる。まず東巴だけでも2、30人は必要という参加者の多さ。つぎに時間的な多(長)さ、そしてかかる費用の多さである。神霊や鬼などに捧げるいけにえの家畜、供物だけでも舌を巻くほどだが、それに参加者の連日の飲食費を加えると、その巨額の費用たるや一般人ではとても負担できるものではない。こうした理由から、新中国成立以前もめったに行なわれるものではなかったし、その後では、長期にわたる政治的な大変動により、ますます実施が困難になっていたという事情がある。

老東巴・和秀氏

年齢80に近い老東巴・和秀氏は、かつて麗江地区内で「求

寿」儀式に参加したことのある唯一健在の東巴である。その60年以上前の儀式は彼の一族のために行われた。もしこの病気がちな老東巴が亡くなってしまったなら、この儀式を後世に伝える歴史の証人が失われ、その本来の姿を記録し、復活させるすべがなくなってしまう。また、不完全な資料に基づいてむりやり復活させたなら、誰にも認められない筋の通らぬものとなり、その意義も大いに割り引かねばならない。幸いにも、今回の「求寿」儀式復活の知らせを聞いて以来、何度か生死をさまようほどの大病を経た老東巴であったが、「この儀式をやり終えないで、どうして死ねようか」と元気を取り戻してくれたのである。

儀式の対象となる東巴の決定

今回の儀式は、雲南省麗江市玉龍納西族自治県塔城郷依隴行政村署明片五組に住む東巴、楊玉華^{ヤンユイホア}(28歳、既婚)を対象として行なわれた。

楊玉華は中学卒業ののち東巴となった青年で、現在、兄とともに東巴研究院で東巴としてのさらなる技術を学んでいる。彼の家は代々東巴で、すでに8代を数え、「加威靈」儀式に参加した者もいる。祖父(故人)は著名な東巴で、大きな威力をもつ神像(画像)を所持していたが、父の代になると時代の関係もあり、東巴を学ぶことができなかったという。儀式は世襲の東巴宅でという我々の考えと、東巴である以上、大きな威力、靈力を付与されたい、東巴の家系を再興したいという楊玉華の願いが一致して、今回の儀式の執行となった。

また、署明片は麗江より約160キロ、海拔2,700メートル位のところにある。五組は23戸、120人ほど、住民はいずれも楊姓の納西族で、東巴教を信奉している。小麦やジャガイモを植え、家畜を飼う彼らの年収は300元ほどで貧困地区に属するが、衣食に困ることはない。ここでは四方を山に囲まれ、青い空に緑の山々、清らかな水の流れる美しい昔のままの自然が保たれ、人々は、夜であっても戸締りをする必要のない、純朴な風俗をもってい

る。こうした現代の浄土、納西文化の生きた化石ともい
うべき環境が、今回の儀式にさらに絶妙な結果をもたら
したのである。

儀式の日程とあらまし

老東巴和秀氏、著名な研究者でもある和力民氏ホリーミンを含む
28名の東巴（地元16名、麗江より12名）と10余名の助手
が招かれ、参加したが、彼らは経典を100冊以上も暗誦し
ている、踊りの師匠であるなど、みなそれぞれの技を持
つ選ばれた東巴たちであった。

時間の関係で、十分な準備を前提に、すべての儀式を
6日間で行ったのだが、和秀、和力民両氏が協議を重ねて
決定したこの儀式の次第は、具体的な状況に即応し、か
つ重要な部分についてはいささかの漏れや疎かなところ
もないものであった。

1日目（4月2日）

- 1.神座、祭場の設置、焼天香。
- 2.麗江の東巴を迎える儀式。

2日目（4月3日）

- 1.口舌是非鬼を退却させ、凶死鬼を祭る儀式。
コウシャーシーフエイ 2
- 2.穢鬼祭祀と除穢の大規模儀式。

3日目（4月4日）

- 1.薯神ショ（自然神）の大規模祭祀儀式。
- 2.楊家祖先神の招来と祭祀儀式。
- 3.戦神の祭祀儀式。
- 4.星神の祭祀儀式。

4日目（4月5日）

- 1.「祭風」儀式。³
- 2.雷神、稻妻神の祭祀儀式。

5日目（4月6日）

- 1.「加威靈」儀式。
- 2.大型「焼天香」儀式。
- 3.華神など大神を招来、福を賜る、「求寿」儀式。
- 4.家畜神の祭祀儀式。

6日目（4月7日）

- 1.山神の祭祀儀式。
- 2.三朶神サンド（地域神）の祭祀儀式。
- 3.祭天儀式。
- 4.「送龍神」儀式。
- 5.家神の祭祀儀式。

以上20ほどの儀式のほか、多くの小さな儀式があちこ
ちで行われた。大きな儀式は6、7時間を要し、基本的に
この順序で行われたのだが、時には二手に分かれ、また

中庭、村落各地で同時に行われたこともあった。特に4日
目の「祭風」儀式は付近の風光明媚な山頂で、6日目の祭
天儀式は楊玉華の一族（族長楊天順ヤンティエンシュン）の祭天場で行われ
た。

楊玉華宅は南面の傾斜地に建てられ、中庭を囲んで東
南西三方に建物を配する。北側には山の斜面が広がり、
ちょうど天然の見物席となっていた。西側の部屋前の主
となる神壇には刹利威登サーリウエーデ、恒迪窩盤ヘンドウオパー、丁巴什羅神トンバシロなどの
大神、戦神などが祭られ、中庭の中央には上に鶴の飾り
を施した樹木が高々と立てられ、五色の糸でつくられた
幾何学的図案や紙の花などで美しく飾られていた。

儀式の期間中、東巴たちは延べ200冊以上の経典（世
界で唯一残されている生きた象形文字、東巴文字で書か
れている）を読み、「白獅舞」「射箭舞」など20近い東巴
舞を踊った。祭場には、終日、線香や松の枝をいぶす煙
が立ち込め、神前には小麦や粘土で作ったさまざまな人
形、米などの穀物、酒、茶、酥油バター、塩、砂糖、香炉、ラ
ンプ、ローソク、聖水の碗などがところ狭しと置かれた。
もともと1週間以上の内容であったため、連日、夜になっ
ても昼のように灯りがともされ、継続的に儀式が行われ
た。最も遅い時刻では、4月4日の戦神祭祀が深夜の3時半
まで続いた。こうして我々の調査活動も毎日十数時間を
越えていた。

神霊や鬼に捧げられたいけにえの家畜は、黄牛1頭（4
歳以下いづれもオス）山羊3匹、白綿羊1匹、黒毛豚2頭
（3歳）鶏20羽にのぼった。殺す前、すべては神霊や鬼
に捧げるためであるから、規則どおりに行い、自分たち
東巴には罪はないという意味の経文が読まれ、専らこの
方面をつかさどる東巴が頸部にナイフを刺した。一般に、
家畜はまず生きたまま捧げられる。つぎに鮮血、そして
切り分けた主要な部位肉、最後に煮てスープとしたもの
と、あわせて4回捧げられた。

また百枚以上の巧みに描かれた木牌、粘土や小麦粉で
作られた数十もの人形、真に迫った表情の紙製の羊、樹
枝で編まれた馬、踊りに使う花束、弓矢などが作られ、
準備途中の品々もあり、その数は「焼天香」に使うため
に切り出されてきて積み上げられた松の枝だけでも山の
ようであった。

神の意向はなにものより崇高である

実際、今回の儀式には村中をあげて参加していた。特
に「加威靈」儀式の時には、遠近より200人以上も見物に
訪れ、人々は歓声を上げ、何度も興奮の渦に包まれた。



3ヶ月の乳飲み子から、最高齢は73歳の老婆まで、みな一番よい服を着て、お祭りの日のようであった。小学生は、先生に引率されて見物にやってきた。

儀式を執行している側には「人に見せるため」という意識は少しもなかった。東巴たちはただ敬虔な信仰心から、抑揚を付け、間をおき、調子を変えては経文を読み、あたかも酔いしれたように、熱に浮かされたように踊った。見ているものたちはこれに歓声をあげ、我を忘れたように興奮の中に身をおいた。こうした姿は感動するに十分であった。

また神霊への人々の畏敬の念を示すものとして、次のようなことがあげられる。華神祭祀に用いる2本の柏の木は、切り倒したのち、牛に引かせたりトラクターで運んだりせず、5キロの道のりを人々が一步一步かづいで来た。私は美しく描かれた木牌を記念に持ち帰りたいと願ったが、使用した木牌は、3枚を特定の人に送り、残りはすべて焼却するのが神の意であるとのこと、あきらめざるを

得なかった。暑神は精進料理しか食べなかったとの記載にもとづき、暑神祭祀の日は、全村で1人の例外もなく、肉食をしなかった。星神の祭祀は、ある最も明るい星が一定の位置に来たときに始めることになっており、みな夜中の12時半までひたすらその時を待った。戦神の祭祀時には女性は避けるよう求められ、楊玉華の母親と妻でさえ台所に身を隠した。私とて、この儀式を組織したにもかかわらず、何の特権も持ち合わせなかった。この特定の場所、特定の時間において、神霊の意向は何よりも崇高なものであり、こうしてその場の空気はより神聖になっていくのである。

我々はこの上ない崇敬の念を抱いて神の意志に従った。神もこれに感動したのか、数日前まで雨の降り続いていた暑明片は、儀式の前日から連日晴れ渡った。4日の儀式のとき、東巴経の言い方として、儀式が霊験あらたかか否かは雨が降るかどうかによって言っていたところ、雲ひとつない青空から突然一陣の小雨が降ったのである。

写真1



「加威靈」儀式の東巴舞。後方は見物に来た村人、子どもたち。

写真2



「加威靈」儀式において、「神米」が撒かれるのをじっと待つ東巴たち。

今回、私、夏を代表とする神奈川大学COE、張福龍、和力民両氏を代表とする麗江市東巴文化研究院、撮影技師の任春生氏を代表とする中国社会科学院民族文学研究所の三者が密に協力し合ったことにより、本来の姿の「求寿」儀式に対する多角的調査が実施され、大きな成功を収めることができた。調査期間中は予想以上にきつく忙しかったが、充実した意義深い日々であり、生涯忘れられぬものとなった。今、目を閉じると、耳が聞こえなくなるほどの銅鑼の音が耳元に響き、神名を賜り喜ぶ東巴たちの幸せな笑顔が目に見え、そして暑明片の満天の星空が思い出される。北京と麗江の専門家たちもみな、今回の儀式は納西族のこの半世紀近くにおいて最も意義のあるもので、東巴たち、とりわけ若い東巴たちにめったにない実践的鍛錬の機会を与えたと同時に、東巴文化を当地および麗江地区全体において、さらに広く深く普及させ、伝承させたと評価している。人類学、民族学、民俗学、社会学の角度から見ても、そこに含まれる「黄金」の量は非常に多い。我々は資料の整理、研究などを引き続き行い、非文字資料の体系化方面から人類の文化研究に更なる貢献をしたいと願っている。

- 1：仏教、道教、キリスト教、イスラム教など人（教主）の創始した宗教をいう。
- 2：言葉や行為の行き違いから発生する鬼。
- 3：自然の風に対する祭祀、及び正常な死亡ではない者の魂は風鬼に変わり、祟るので、これを祭祀する儀式。